大洗の本

第3号

令和４年５月２日発行

目次

2 巻頭言

5 古墳時代前期の常陸 ～磯浜古墳群と海の交通～
大内 みなみ

13 古代鹿嶋郡宮田郷における海産物の生産と流通（予察）
蓼沼 香未由

24 海の向こうのアメリカ
加倉井 東・浅井 敦

46 和歌森太郎の一九四二年九月大洗調査
由谷 裕哉

57 大洗を走ったバスの切符
本多 雅浩

表紙イラスト：小野瀬敦子

和歌森太郎の一九四二年九月大洗調査

由谷 裕哉

一　和歌森太郎とは

本稿は、歴史学者・民俗学者の和歌森太郎（一九一五―七七）が一九四二年九月に大洗を訪れ、民俗調査を行ったことの周辺を探求する。まず、和歌森太郎とはどんな人物か、について。

和歌森は東京文理科大学で松本彦次郎、肥後和男らに学び、一九四一年頃から柳田國男を囲む木曜会（註1）のメンバーになった。敗戦後は東京教育大学教授を務め、歴史民俗学とも呼ぶべき研究をリードしてきた。きわめて著作が多いが、その中心は修験道（『修験道史研究』）、神社祭祀（『美保神社の研究』ほか）、民俗学の方法論（『日本民俗学概説』その他）、などであろう。

個々のテーマに関して影響力が大きかったこともあり、修験道研究については今世紀以降に限定しても、筆者、時枝務、関口真規子、長谷川賢二らによる研究や位置づけがあり（註2）、歴史学との関わりを含む民俗学方法論に関しては、柏木亨介による一連の研究がある（註3）。神社祭祀研究に関しては、他に協同体史（『中世協同体の研究』）も含めた位置づけを、かつて伊藤幹治が行ったことがあった（註4）。

とはいえ、彼が大洗を訪れて民俗調査をしたことについては、筆者が事実関係の一部に誤りがあることを指摘した（註5）以外、これまで注目されてこなかったと思われる。大洗にとっては、柳田門下の研究者がこの時期に訪れて民俗調査を行ったことに意味があると思われるので、本稿ではこの問題を考えることにしたい。

二　和歌森太郎の一九四二年九月大洗調査までの軌跡

（1）木曜会加入まで

和歌森の卒業論文タイトルは「中世修験道成立の因縁とその展開」で、完成し提出された時期は一九三八年とされている（註6）。東京文理科大学の卒業は一九三九年であった。この年に同大学の助手に就任し、肥後和男の宮座調査を手伝ったらしい。しかし、その年の内に北支河南省に兵士として従軍した由である（『修験道史研究』の序）。『修験道史研究』の東洋文庫版における自らの解説によれば、卒業論文の第一、二章に当たる部分を卒業後に『歴史教育』『史潮』に発表し、北支からの帰還後、残りの部分を『宗教研究』『解釈と鑑賞』などに公表したという（註7）。

一九四三年刊の『修験道史研究』に再録された「小島法師について」は、『歴史と国文学』の一九三九年一一月号に掲載されたとのことである。同書の序に、「卒業後に書きました私の論文の中で、修験道に関係あるものを選び収めた」云々とあるので、当該論文は東京文理科大学を一九三九年に卒業後、北支への従軍前に当該誌に投稿されたのではないかと思われる。

翌一九四〇年、胸膜炎に罹ったため帰還し、東京文理科大学副手となった（註8）。

（2）木曜会および民間伝承の会での活動

成城の柳田國男邸で毎月開催されていた木曜会へは、東京文理科大学の後輩に当たる直江広治に紹介され、一九四一年五月頃から参加するようになったという（註9）。

一方、民間伝承の会（註10）の機関誌『民間伝承』誌バックナンバーによれば、「新入会員紹介」コーナーの「東京」に名前の見えるのが、第六巻第七号（一九四一年四月刊）なので、木曜会参加より前に同会に入会した模様である。大洗調査の前までに同誌に投稿した論考は、最初が第七巻第五号（一九四二年二月）の「氏神について」。

続いて、「オモユとママハハ」が第八巻第三号（一九四二年七月）、「八朔考」が同巻第四号（同年八月）に掲載されている。

このうち「オモユとママハハ」については、第八巻第五号（同年九月）に板垣勇治郎「「オモユ」について」という批判が掲載され、それに対して同巻第七号（同年一一月）に和歌森が「「オモユ」につき板垣氏に答ふ」を書いて反論した。板垣による批判とそれに対する和歌森の反論は、刊行された時期としては大洗調査とほぼ同じかその後になるが、この顛末について少しだけ見ておく。

和歌森は「オモユとママハハ」において、「オモユ」とは御飯を炊くときに得られる粘性のものを指すとし、各地の民俗用語を参照する。また、糊として利用され、病人乳幼児の食料などにも使われるとする。飯のことを幼児がママというので、オモはママの転訛か、と問題提起される。

イエスペルセンが参照され（M音など唇音が発音されやすい、など）、また古代に母がオモとされたことなどから、オモユやママユは母乳を指す、と一旦は結論づけられる。そこからママハハの語源論に移り、親愛の親子関係が新たに要請される為に「ママ」が付いた、などの推測が展開されたまま「未完」となっている。そもそも、義母のことをママハハということと、御飯を炊くときの汁とを関連づけるのが奇妙で、検証も反証も不可能な議論であろう。

これに対する板垣の批判だが、「一読するのに、その文のやゝ癖のあるのに悩まされた」「私はその論述の仕方に不満をもつ」云々と始まる。詳細は略するが、個々の立論がかなり恣意的だとの批判であった。これに対して和歌森の反批判は、慇懃無礼なですます調になっている。これも詳細を割愛するが、批判者はイエスペルセンについて不勉強だという趣旨の文言があるなど、相当に上から目線で自らの論全てを正当化するものであった。

ともあれ、「オモユとママハハ」に関わる応酬は我々後世の読者から見ても後味が悪いものに思え、和歌森にとって不名誉なアウトプットの一つであろう。

和歌森はこの他、この時期の『民間伝承』誌の「批評

紹介」に少なからず寄稿しているが、そのうち第八巻第一号（一九四二年五月）にはシロコゴルフ『北方ツングースの社会構成』を紹介している。また「学会消息」というコーナーでの木曜会例会の報告によれば、一九四二年五月二三日の木曜会第一八九回例会で、「北米土民」の霊魂観念を日本人と比較する報告をした模様（『民間伝承』第八巻第三号）。

以上、敗戦までの和歌森と云うと『修験道史研究』に代表される宗教史研究という印象を抱きがちだが、以上のように木曜会および民間伝承の会においては、彼の黒歴史とも見なせる民俗語彙論の他にも、海外を含む多方面に関心を拡げていたことが分かる。

（3）国民精神文化研究所の嘱託として

和歌森はこの時期、本務の東京文理科大学に加え、木曜会、民間伝承の会の他に、皇国の教学を指導せんとする国民精神文化研究所との関わりも有していた。同研究所には柳田國男の推薦により、一九四二年に「国民伝統調査」を嘱託されたという（註11）。同研究所の同年八月刊『国民精神文化研究所要覧』の「神社及神事調査要項」項目中の「調査関係職員」に、「調査課勤務」「国民伝統調査嘱託」として彼の氏名が記されている（同要覧三二頁）。

実は本稿起稿まで色々調べてはみたが、和歌森と国民精神文化研究所との関わりをこれ以上明確にはできなかった。占領軍によって超国家主義団体と名指しされ、専任の多くの者が公職追放された組織であり、一方で和歌森は筑波大学構想に反対して東京教育大学を退職したとされるように戦後はリベラルな姿勢で知られていたので、同研究所との関わりを公にしたくなかったのかもしれない。ここでは、『修験道史研究』の「付録」に入っている「仏名会の成立」が同研究所の雑誌『国民精神文化』の一九四二年一一月号に掲載されたこと、本稿で対象とする大洗調査の直前に行われた鹿島神宮調査が同研究所の事業として行われたこと、の二点を明記するに留める。このうち後者については、上記『要覧』の「調査課主任」正木篤三、「調査課勤務」「助手」堀一郎（註12）と共同で行ったらしい。

和歌森単独の論考は「鹿島神宮式年御船祭参観記」として、『教学』第九巻第八号（一九四三年九月）に掲載された（註13）。国立国会図書館のオンラインサーチによれば、この雑誌は『国民精神文化』誌を継承して第九巻第四号から第一〇号まで国民精神文化研究所の編集・出版だったとのことである（その後は教学錬成所の編・刊）。ここでは、『和歌森太郎著作集』第一四巻（弘文堂、一九八二年）に再録され、現代仮名遣いに直された形により、簡単に見ておきたい。

同参観記（著作集版では「鹿島神宮の信仰と御船祭」と改題）は、一九四二年八月三一日から九月三日まで、一二年に一度行われる官幣大社鹿島神宮の特殊神事「御船祭」の調査記録となっている。もっとも、実際に報告されているのは九月二日までであり、また報告も祭礼の参与観察が主眼ではなく、とくに前半は関係者からの聞き取りが主に収録されている。

すなわち、八月三一日は旧主典H（著作集版では実名だが、姓のイニシャルにしておく）、九月一日は東海岸小宮作（こみやさく）（現・鹿嶋市）に移動し、同地の六〇歳Mから聞き取りし、鹿島神宮が漁業神であることや小宮作の住吉神社と鹿島神宮との関係、下津（現・鹿嶋市）の高天原などの情報が記されている。この日に根本寺（こんぽんじ）（同上、臨済宗）を訪ねていたという「僚友」堀一郎からの情報（鹿島太神宮の縁起ほか）も、付記されている。

後半、「夕食の頃」（一三〇頁）から後は、一日の夕方以降と二日の祭礼が記録されている。例えば二日正午からの香取神宮と滑川（現・千葉県成田市）の小御門神社とによる奉迎祭については、各地の「寄り合い祭」の類例であるとしても、とくに別格官幣社小御門神社との関係については「大きな不可解が残る」（一三六頁）、などとしている。

三「大洗採訪記―鹿島信仰をめぐる諸問題―」を巡って

冒頭、「昭和十七年九月三日」と始まるので、鹿島神宮御船祭の行宮から本殿への還幸が行われていた筈の三

日、あるいはその前日のうちに、和歌森は大洗に移動していた模様である。掲載誌は『教学』第九巻第一〇号で、一九四三年一一月刊とのことである（上記著作集同巻五三五頁）。『教学』は上記のように国民精神文化研究がこの時期に発行していた雑誌であったので、和歌森の大洗調査も同研究所の事業の一環だったことになろう。

全体の論述は与利幾神社と八朔祭とに分かれる。ここでも、鹿島神宮御船祭の調査と同様、話者は一日一人だった模様で、それは与利幾神社を祭祀する旧家の八五歳S女であったとされる。和歌森は、「この年齢としては驚くに足るほど健全な頭脳を維持し、かつて大家の主婦だった風格を十分に備えている」と彼女を評価している。

まず与利幾神社について。出典不記載の「与利幾神社縁起」が引用され、流れ着いた巨木を大国魂命として祀り奉った、とする。一方で、立て札に「建御名方神」と標記されていることが付され、両神の関わりに注意をうながす。社殿の景観や鎮座地周辺の説明の後、再度S家に伝わる明治二六年（一八九三）の由来が引用されるが、下記のように語られた後、そこでも祭神が大国魂神とされると云う。

我ハ是大洗ノ大神ニ随従シ世界ノ民天災地殃且ツ病ニ罹リテ非命ノ死ヲ免レシメント欲シ普ク天下ヲ巡視ス。上陸セントスル際汝カ為メニ意速ニ達ス然レトモ汝凡夫不知シテ斧鉞ヲ充ツ奚ソ仔細ノ傷モ被ルコトナシ。更ニ告ク明年ヨリ関八州及奥州大飢饉四ケ年打続テ米穀乏シ悪疾流行ス予テ貯蓄ノ方法ヲトリ、此難ヲ避ケヨ、我又海漁ヲ隆盛ナラシメ禍除キ福ヲ得セシメントス

考察として、神社名は「寄り来」か「寄り木」から来ていること、S女によれば巨木がお諏訪様であるのに、庄屋のs（大洗に多い姓）が小便をかけ、不敬なことをしたとの伝があると語ったことは、おそらくその庄屋をうらむ筋による誤伝であろうが、大洗磯前神社が大己貴神であることから当社の祭神を建御名方神とするのは、それに「随従」する意味を持つであろう、などとする。

たしかに、大己貴命―建御名方神という父子を二つの神社の主従関係と見るのはなるほどと思えるが、それでは先に引用された二種の縁起・由来（最初のものは上記

のように出典不記載で、後者は上記引用のように祭神が何かの箇所は引用されていない）で、漂着した巨木を大国魂神として祀ったとされていたことは、どう解釈すれば良いのだろうか。なお、大国魂神は大洗磯前神社の御祭神の一つである大己貴命と同一とされる場合があるが、和歌森はそのことを付記していない。

このパートでは他に、S女から聞いた与利幾神社の祭り（大洗磯前神社の神官とS家の身内のみが参列する）、町に関わるその他の習俗伝承（町世話人、大般若、盆、船止めなど）も付記される。

同稿の後半は、八朔祭についてである。S女から、八朔祭で「鬼板」と俗称される楯を海浜の井戸の上にかざして洗う役をS家の当主が務めていたとする情報を得たことに対し、その「鬼板がえし」は沼前村網掛と宮ヶ崎（ともに、現・東茨城郡茨城町）の村社鹿島神社の祀官が行うのが本来であったとする。

続いて、農村で一般的な八朔祭（註14）が大洗磯前神社の九月九日の例祭に発展解消されたものの、旧慣忘れ難く、旧八朔の日に特殊神事として「昔ながらの八朔祭」を行ってきたとし、『大洗磯前神社本縁』（註15）を引用して紹介する（影印と若干異なるが、以下和歌森により引用）。

八月朔、宮崎網掛両村祠官二人護二送矛盾一而来、号レ盾曰二鬼板一闊二尺長三尺許、古画漫漶雖レ不レ可二識別一而皆魑罔両之形也、持二鬼板一者名曰二政所一著二素襖一、扈従四人著二肩衣袴一、其一名曰二代官一、其三名レ士与二政所一皆騎而来

この引用に関わる説明のうち、注連切りが行われた場所の記載が誤りであることを、筆者は既に指摘した（註16）。ともあれ、この注連切は、タケミカヅチ神が皇孫に先立って天上より降りることに対し、オオナムチノ神が注連を張って防いだのを切ったという故事によるとしつつも、「これはもとよりそうした行事があって後に結びつけられた説明神話であろう」（著作集一四三頁）、と不思議な解釈を加えている。

続けて、これは鹿島社のような大社の近辺で見られる「寄り合い祭」の一種であるが、「鹿島より神使がなくては大洗の祭は最後まで埒があかぬといってよいほど」（同上頁）とされる（「寄り合い祭」の語は、上述のよ

うに鹿島神宮御船祭の報告論文に既出であった）。具体的には、注連縄を切って本社に近づく鹿島神社の使いを大洗の神官が社殿下で迎え、楯・矛をあらかじめ開扉されている本殿に奉安する。献饌祝詞の後、鹿島側が小林楼で昼食をとることを「直会」と称し、その費用を祭り一般も含めて磯浜町が負担する。

直会の後、鹿島側一行は渚に出て、上磯に塩水が湛えられている壇上の岩があって、その上に鬼板をかざして三回ひるがえす。ひるがえすのは鹿島神社の社掌で、柄に手を添えるのは大洗の神官であり、S女のいうように同家の者が参与したかは疑わしいとする。この後で、一町ほど北の「壇の浦」という所に注連を張り巡らした中に土壇が築かれており、そこに鉾と盾を刺し立てて、各町の大世話人と船主、漁業関係者が「大漁祈願」「町内安全」を祈念する。和歌森は、「漁業者にとって文字通り有難い神として崇信された鹿島の神が、八朔の時化の多い頃、神領内の統摂地たる磯浜領民のために漁業を妨げる悪鬼調伏を意義する神事を行なうために迎えられた」（一四四頁）、と解釈している。このように和歌森は、鹿島神宮御船祭調査の際、話者Mより鹿島神が漁業神だと聞いたことをおそらく踏まえ、大洗の八朔祭をも漁業関係者の為の祭礼と解釈している。

このようにして八朔祭が終了後、沼前村の代表は大貫町の村社諏訪神社に立ち寄って祭式を挙げ、夕刻帰村する、などと記載される。また、磯浜町側では八朔祭に山車を出すこと、余興を催すことも付記される。

さらに旧九月二五日に行われる神事祭についても『本縁』を参照しながら、有賀（現・水戸市）からは矛のみが馬車に乗ってくること、有賀神社の祭神もまた「鹿島神」とされること、土産に里芋や柚子などがもたらされること、列を先導する氏子が法螺貝を吹くことなどが付記され、これも八朔祭と同種の農村と漁村との寄り合い祭であると解釈する。

四　小括

和歌森の大洗調査報告のうち、与利幾神社については、祭神説に大国魂神と建御名方神という二説があるこ

とに注意をうながしたことが重要であろうが、先に概要したように大国魂神説についての考察はされていないので、二説が併存する理由は結局分からないままであった。

八朔祭については、当時は今のように影印と翻刻とが併せて刊行されてはいなかった『大洗磯前大明神本縁』に主として依拠しながら、鹿島神宮のような大社の周辺に見られる「寄り合い祭」の一つだと解釈している。さらに、八朔祭そのものを、「磯浜漁民のために漁業を妨げる悪鬼調伏を意義する神事を行なうために」「鹿島の神」を迎えるもの（著作集版一四四頁）、と解釈している。この点は、彼が大洗調査を行う前日の九月二日まで鹿島神宮の祭礼を調査していたことの影響があるのかもしれないが、旧暦九月の有賀祭もその一種としているのは興味深い。これは、ずっと後になって刊行された『大洗町史通史編』（一九八六年）で有賀祭について、大貫の諏訪神もかつては大洗磯前神社に渡御したという情報を参照しつつ、近郷の神社から大洗磯前神社への「磯下り」の一つだと解釈していること（同編三五〇頁）、また茨城県神社庁の『茨城の神事』（一九八九年）で子どもの虫切りに霊験ある神事のため、大御鉾に幼児を触れさせるなどと記されていること（同書四四頁）と、大きく異なっている。

以上、和歌森の大洗調査報告をかなり圧縮して概要した。和歌森自身がまだ二〇代後半で、柳田の指導を受け始めて一年余りであり、前述の「オモユとママハハ」のような奇妙な論をも草していた頃のことである。八朔祭（および有賀祭）については後日の参与調査がなされなかった模様だし、話者が一人だけで事実関係におかしな点もあったが、先にも見たように後世の『大洗町史通史編』などとは異なる独自の着眼点や解釈もみられる。とはいえ、戦時下の国民精神文化研究所の調査であったこともあり、同研究所の『教学』という地元でほぼ知られていないようなメディアに出されたのは、調査地への貢献という点で残念な気がする。

もし、本稿の概要で読者が和歌森による大洗調査に関心を抱かれたようなら、『和歌森太郎著作集』は公共図書館に架蔵されていることが多いので（茨城県立図書館には全巻ある模様）、ぜひ現物をお読みいただければと

思う。

（註1）一九三四年一月に、柳田邸で前年から行われていた「民間伝承論」講義の延長として、毎月行われるようになった研究会のこと。福田アジオ『日本の民俗学　「野」の学問の二〇〇年』（吉川弘文館、二〇〇九年）、一二二頁を参照。

（註2）由谷裕哉「修験道系柱松をどう捉えるか」（『寺社と民衆』九、二〇一三年）、時枝務「修験道史における里修験の位相」（『近世修験道の諸相』岩田書院、二〇一三年）、関口真規子「和歌森太郎の修験道研究とその発展・展望」（『宗教研究』八七巻別冊、二〇一四年）、長谷川賢二「修験道史研究の歩み」（時枝務・長谷川賢二・林淳〈編〉『修験道史入門』岩田書院、二〇一五年）。

（註3）柏木亨介「和歌森太郎の伝承論における社会規範概念」（『史境』五九、二〇〇九年）、同「現代民俗学における三つの歴史概念―普遍性・遡及・変遷―」（古家信平〈編〉『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館、二〇一八年）。

（註4）伊藤幹治『宗教と社会構造』（弘文堂、一九八八年）、二二三―二三〇頁。

（註5）由谷裕哉（編）『神社合祀再考』（岩田書院、二〇二〇年）、一八八頁。

（註6）「和歌森太郎　年譜抄」（和歌森太郎刊行会『和歌森太郎』弘文堂、一九七八年）、三四八頁。

（註7）本稿のテーマから外れるため、東洋文庫版『修験道史入門』に記載されていない個々の論考の、題目、掲載誌の号数および刊行年月については省略する。これらの情報は、次に全て掲載されている。宮家準「和歌森太郎教授の修験道・山岳宗教研究」（『和歌森太郎著作集』第一四巻、弘文堂、一九八〇年）、四七三―四七四頁。

（註8）「和歌森太郎　年譜抄」（前掲註6）、同上頁。

（註9）和歌森太郎「歴史と民俗の間で」（『日本の民俗』二、河出書房出版社、一九七六年）、二八九―二九〇頁。

（註10）一九三五年に柳田の還暦を記念して日本青年館を会場に行われた日本民俗講習会を契機として組織された、日本民俗学の研究団体。現在の日本民俗学会の前身。

（註11）「歴史と民俗の間で」（前掲注9）、二九二頁。

（註12）堀一郎『聖と俗の葛藤』（平凡社ライブラリー、一九九三年）の「紆余曲折」というパートに、堀が国民精神文化研究所時代を回想する箇所がある。そこでは、堀が「鹿島神宮の軍神祭」について書いた報告が研究所内で評価され、神社のお祭りの調査をやってみないかということになり、和歌森太郎に加わってもらった。「それ

が和歌森君とつき合い出したはじめですね」（同書二九六頁）とある。堀と和歌森は、それ以前から木曜会で知り合いだったと推察されるので少し奇妙だが、情報として付記しておく。

（註13）同論文を正木篤三・堀一郎・和歌森太郎の共著とする情報もあるが、筆者は初出形態を未確認。なお、本文で参照した著作集第一四巻では初出を『国民精神文化』九―八、とするが、同誌はＮＤＬサーチによると第九巻第三号が終刊とされるので、『教学』の誤りと考え本文では修正した。

（註14）和歌森は『民間伝承』第八巻第四号に寄稿した「八朔考」において、①太鼓を叩く虫送り、②馬などのしんこ細工を作って贈ったり、初児の祝として宅内に飾ったりする、③休息日として贈答を交換する、の三通りを八朔行事としてあげている。したがって、ここで彼が「一般的な」と形容したのは、この三者を念頭に置いているのであろう。

（註15）現在は、次のような影印と翻刻とを併せて収録した本が出されている。『大洗磯前神社本縁』（大洗磯前神社、一九九八年）。和歌森がどのようにこの史料の写しを取得できたのかは、『教学』九―一〇掲載の和歌森論に彼が大洗磯前神社を訪れて文書を調査した旨の文章が無いので、不明である。

（註16）前掲注5を参照。注連切りが行われる場所を曲松ではなく、「明神町の警防署・郵便局前のところ」（著作集一四三頁）に注連縄が張られたとしている。八朔祭の注連切については、次の本の口絵に昭和初期の写真が掲載されており、その場所が明神町でないのは明らか。大久保景明『大洗歴史漫歩』（私家版、二〇〇二年）。

【編集後記】　毎年積み上げて、第三号も定期のＧＷに刊行することができました。本誌は、大洗地域を扱う郷土誌、地方誌に分類される雑誌ですが、一定の水準に達した内容を提供できるのも、第一・二号を含め、執筆者各位の不断の努力の賜物かと思います。その成果を、大洗地域の郷土史に向けていただけるのは、ありがたいことです。

毎号ご執筆いただいているベテラン層以外に、今回は高等学校を卒業したばかりの未来ある学徒に参加いただきました。郷土の未来を切り開いていくのは、語るまでもなく、現役世代の役割が重要です。若い世代が、郷土を知って未来を想像していくことに参画することこそが本誌の目指す大きな部分でもあります。今後の研究の進展に期待したいと思います。

大洗の本 第3号

発行日	令和４年5月2日
発行人	大洗博覧会２０２２実行委員会
編集人	大洗博覧会２０２２実行委員会 蓼沼 香未由
装幀	KURIHARA DESIGN OFFICE
お問合せ	（名）江口又新堂 TEL（029）267-3033 FAX（029）267-3073
印刷	株式会社ポプルス

著作権法上の例外を除き本誌の無断転載・複製を禁ず